

## 脳研究推進委員会委員長



このたび脳研究推進委員会の委員長を拝命しました理化学研究所の林（高木）朗子です。前期は、岡野委員長が采配をふるう同委員会に委員として参加し、熱い議論を交わしたことを刻銘に覚えております。このような勢いを衰えさせることなく、日本神経化学会、さらに言えば、世界レベルの脳科学へ貢献するために尽力申し上げます。

さて、先生方も御存じのように、神経化学を取り巻く国内外の状況は刻々と変化し、タイムリーに効果的な対応を打ち出す必要性があります。世界最大の脳科学コミュニティである北米神経科学会ですら学会員の減少とともに財政難に直面しています。いわんや、本邦における少子超高齢化による社会構造の変化は、必然的に研究費や研究者人口の減少、そして本学会の運営を困難なものとするでしょう。また AMED においても「脳と心の研究課」が無くなったこと、文科省においては脳科学委員会がライフサイエンス委員会の下位組織へ再編されたことなどに対して、あちらこちらで不安が漏れ聞こえています。このような中で、脳科連をはじめとする他の脳科学系組織に対する本学会の立ち位置や強みを分析し、有効な戦略を打ち出すことが必要と思われる。そのような思考の中で感じることは2つあります。1つは、神経化学およびその応用・臨床研究の重要性は益々高くなっていること、2つ目には、昔とは異なり、現在の神経化学は学際的にならざるを得ないことです。その意味において、AMED の「脳と心の研究課」がなくなり「疾患基礎研究事業部」に割り当てられたことは、脳科学の「発展的解消」だと感じます。すなわち、痩せ我慢ではなく、真の意味で、すべての領域に神経化学が入り込む余地がある、すべての領域が神経化学である、他の領域への表現の配慮はしつつも、それでも「神経化学のためのライフサイエンス」くらい開き直ったスタイルを貫き通すくらいで良いのではないかと個人的に思っています。実際に「脳とこころの研究推進プログラム」も開始され、それ以外のアンブレラも最大限活用し、学際的な神経化学を推進することに貢献できたらと思います。

また上記の中長期的な問題だけでなく、現在のコロナ禍という一時的ではあるものの非常に大きな障害を乗り越えないといけません。オンラインで集まることもままならない中、学会の意義が、益々問われています。既に知り合いが多いシニア研究者はオンラインだけで事足りる面もありますが、研究を始めたばかりの若手研究者にとっては、大きなマイナスになるでしょう。知識欲を失い、将来的に研究に進む学生の減少につながりはしないかと心配する声もあります。しかし、オンラインでの交流が普及したのを好機ととらえ、地理的・経済的な制約なく、研究に興味のある学生を広く募集できる若手育成は、まさにピンチはチャンスと言える好機かもしれません。若手育成は本学会の真骨頂であるので、各委員会とも連携し、推進していく案件と考えています。